

MINAMI KYUSYU NO JOKAKU

南九州の城郭

第19号 #
南九州城郭談話会報 #
平成14(2002)年12月15日発行 #
#####

中世の水俣城

鶴嶋俊彦

1 水俣城の歴史

正平13年八代名和氏家臣本郷家久城主。康正3年吉賀江五郎左衛門在城。大永5年相良長祗城主。同6年相良長種城主。天正5年深水下総頼延・犬童美作頼安城代。同7年島津氏水俣朴河内城を攻撃。同8年島津氏水俣の浜口・佐敷斗石を攻撃。同9年島津義久の水俣の陣、水俣開城、地頭配置。天正15年秀吉の西征により直轄地。同18年深水織部・犬童頼安城代。文禄2年寺沢志摩守城代。慶長3年寺沢領。同4年小西行長領。同5年加藤清正領、同6年中村将監城代。同17年宇土・矢部・水俣の城の破却。寛永9年細川領となる。慶長5年以降に織豊城郭としての改修が推定されている近世水俣城については、すでに高田徹氏の論考がある(註1)。本稿は中世の水俣城について検討を加える。

いままし、『八代日記』をみてみよう。天文15年11月20日、和泉役人を討ち取った阿多源太左衛門が寄合中とともに水俣に退去している。同16年10月2日に和泉より水俣の「うつぼ木」に夜討を行う。同22年3月21日には相良当主の晴廣が水俣に公儀し、23日に「水俣関持」。翌日には父の上村頼興も水俣に公儀している。同年7月25日には水俣に来訪の長嶋殿に使僧が派遣される。永禄2年5月21日、和泉衆により水俣が落城したが、10月25日には葦北衆が水俣に伏草している。翌年7月3日、中人となった天草尚種が水俣城を受け

取り、相良氏に返還された。永禄8年8月23日、和泉衆が水俣に打ち出し、十二屋敷(門)の者の一部が籠城している。

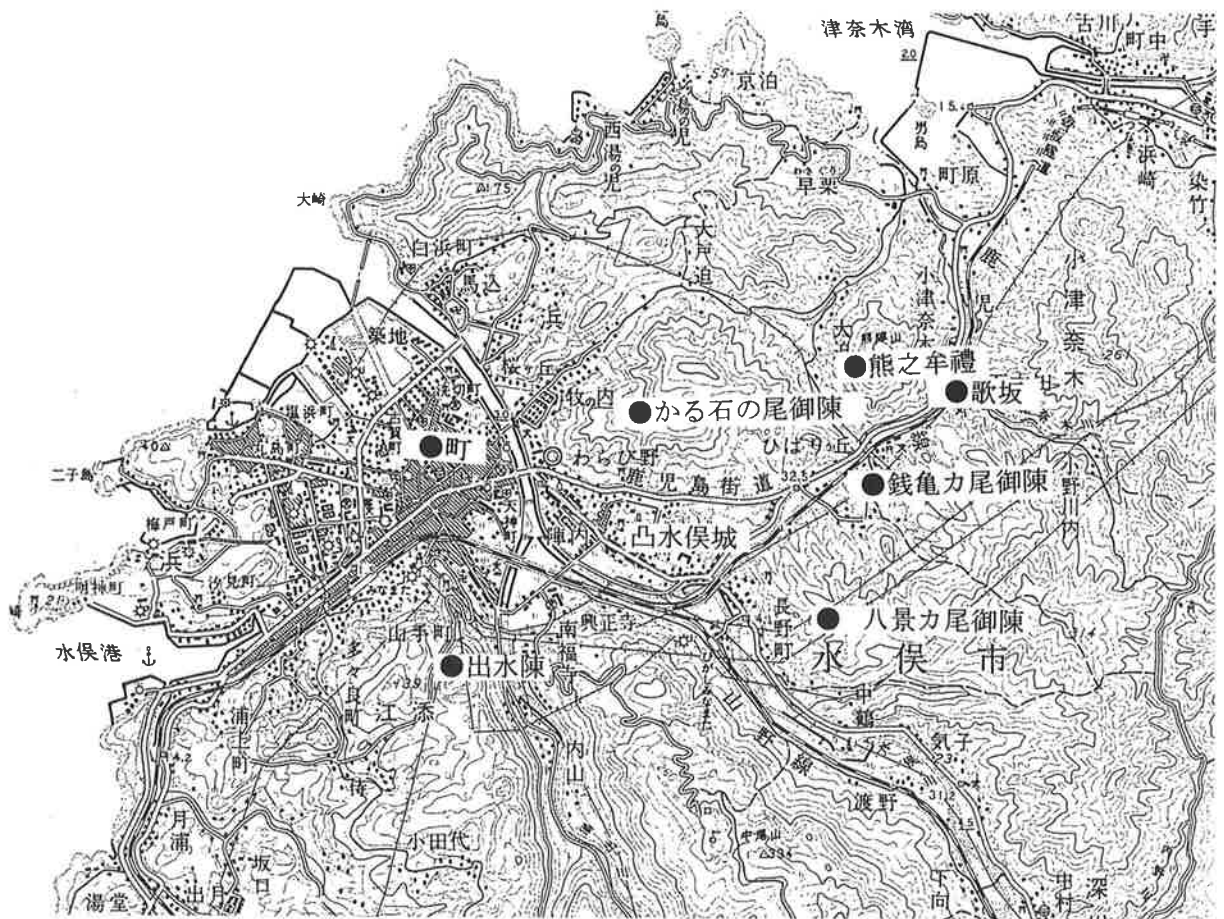
以上のように、水俣は肥後の南端にあり、天正15年に秀吉も国境確定を行っているように、隣国島津氏、特に出水衆の侵攻を受ける境目の紛争地であった。

2 水俣城の構造

八代海に面する葦北郡は山地が卓越した地形でリアス式海岸が形成されている。良港には恵まれているが、生産基盤となる平野は狭小な河谷平野に限られている。水俣城は熊本県水俣市古城一丁目(旧大字陣内字城下・古城・宮ノ上)にあり、水俣川の現河口から2.5kmほど上流の右岸の標高30~50mのシラス台地に築かれている。西北・東側には標高200~300mの山地が迫り、律令期には駅家が置かれて佐敷・湯浦・津奈木・水俣・出水と駅路が貫いたように肥後と薩摩を結ぶ交通の要衝にある。このシラス台地は略東西に1km以上にわたり続くが、侵食により周囲に複雑な崖線が発達し、西方に行くほど侵食度が大きく独立丘陵的な地形となる。

水俣城はこうした急崖の発達する地質を利用したもので、地形的な制約を受けた曲輪の配置から大きくI~IV、4つの曲輪群に区別できる。

Iの曲輪は古城、城山と呼ばれる城地西端



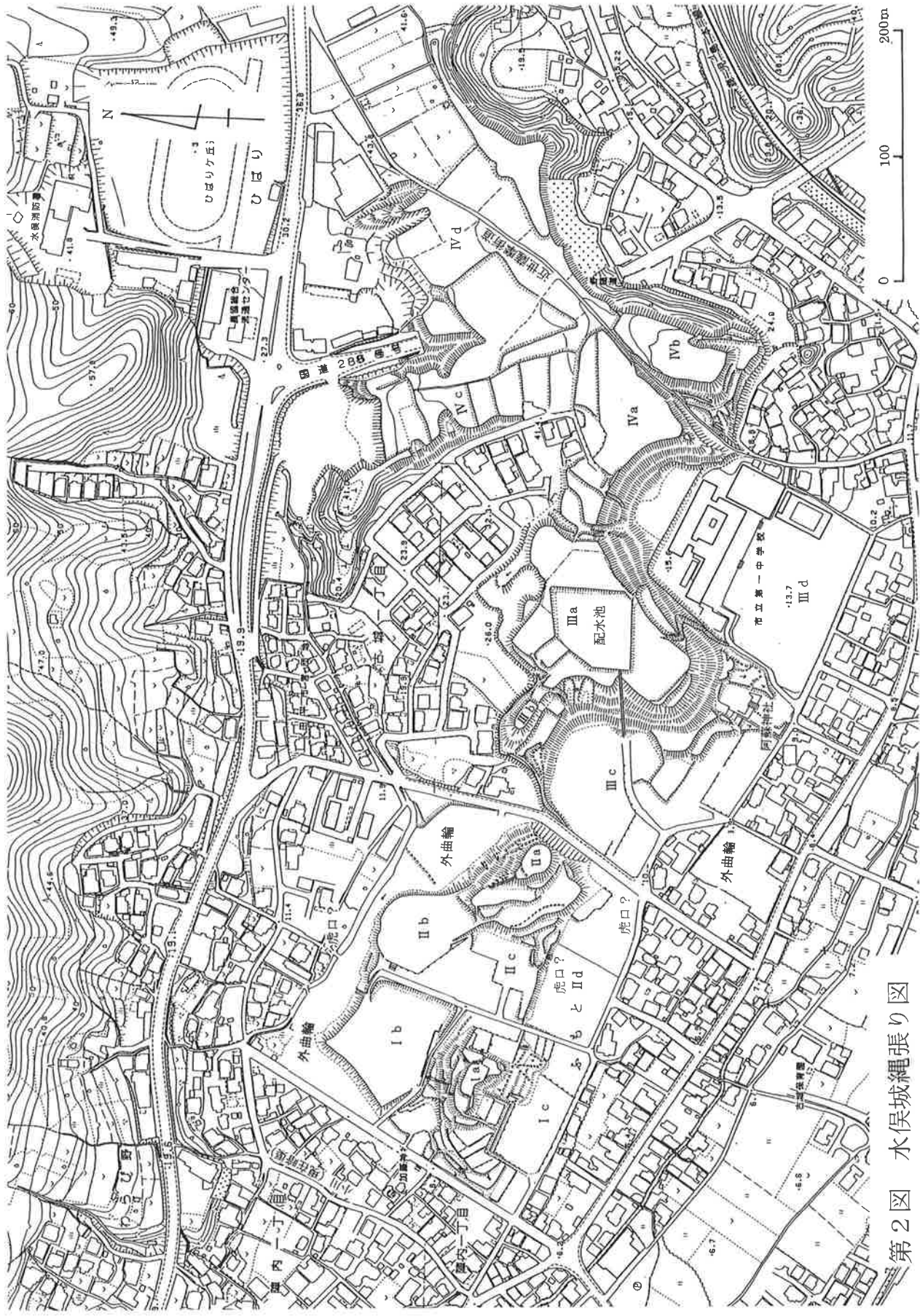
第1図 水俣城と島津軍陣地の位置 1:50,000

部にあり、最高所の標高は29.5 mである。加藤代には織豊城郭として改修された箇所、石垣が残り瓦も散布するが、破壊度が大きく縄張りの復元が困難である。南側には江戸期に惣庄屋を勤めた深水家の屋敷があるが、旧地形を残した南斜面の一部には小竪堀が2条確認できる。北側は標高14 mで現在グラウンドとなり往時の地形はすっかり失われているが、北・西側の高さ5 mの崖線は当時の姿を残すものとみられ、全体で100 × 70 m程度の付属曲輪の存在が推定できる。

Ⅱの曲輪は高城と呼ばれている標高38.1 mの丘を最高所とする。公園化されてはいるが、北西部を除けば大きな地形的な改変はない。後述のⅢの曲輪との間には堀切があり、現在はさらに掘り切られて道路となっている。最高所Ⅱ aの曲輪の西側に数段の小曲輪があり、北側斜面に小規模な竪堀がある。さらにⅡ b・Ⅱ cといった広い曲輪が付属するが、Ⅱ cはⅠの曲輪と連続性をもった地形にあり、南辺

には土塁が残存する。南の麓の屋敷地と推定されるⅡ dの小学校跡地との間に食い違い虎口とみられる通路がある。高田氏をはじめとする従来からの説のように、近世期の城域をこのⅠ・Ⅱの曲輪部分とすることに異論はない。なお、この北・西側には小川が流れており、外堀として近世まで利用されていた可能性が大きい。

Ⅲは最高所の標高が46 mの広い台地面で、現在中心部は上水道の配水池施設が立地し改変を受ける。しかし、縁辺部には遺構が残存している。西側にはⅢ bの櫓台状の小曲輪があり、斜面には3条の連続竪堀があり畝状竪堀群と評価したい。東側Ⅳの曲輪との境の台地くびれ部には、高さ3.5 mの切岸があり、その直下で南に2条の竪堀、北側に竪堀化する横堀を入れて虎口としていたようである。北側麓は現在住宅地となるが台地縁は旧状を残す。南側麓には凹道を通じ、陣内阿蘇神社や看護学校敷地となり、小さな腰曲輪もある。



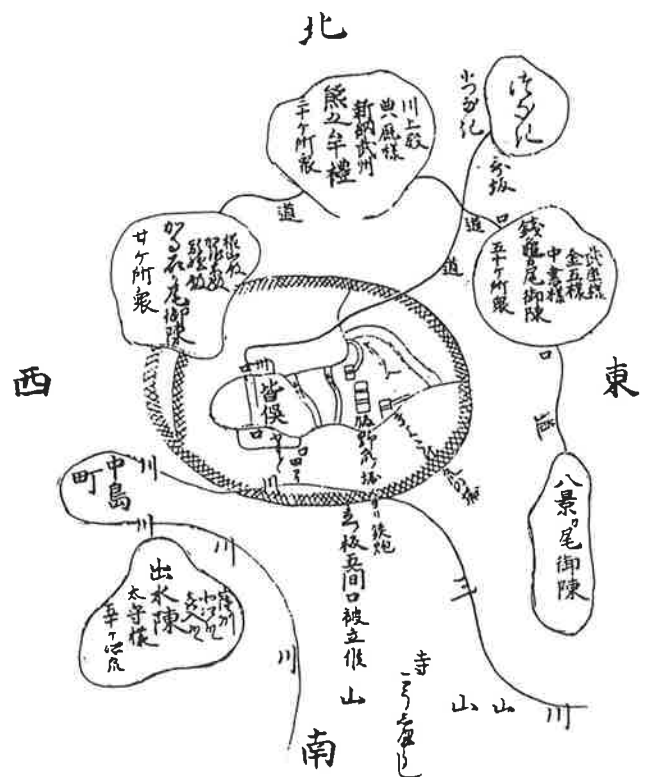
第2図 水俣城縄張り図

IVは台地の基部になる広大な曲輪で、中央を南北に近世薩摩街道が通じる。IIIとの境近くのIV a南斜面に豎堀が1条ある。IV bは堀切状の近世薩摩街道によって独立曲輪の観がある。南東隅に豎堀状の通路があり、南斜面の腰曲輪に迂回して近世薩摩街道に通じ、途中に2条の豎堀と小横堀がある。IVの曲輪は北東の台地基部に向かって次第に低くなる。IV dの北端に2条の豎堀が見られる。IV dの東辺は農地造成により現在比高差5～6mの崖となって改変されているが、東側の豎堀が堀切として南に延びて城域を画していた可能性がある。なお、IV c部分には東西両崖線の対応する二ヶ所に豎堀状の湾入部があり、元々2条の堀切が台地を分断していた可能性がある。

3 「天正九年八月肥州水俣城攻図」に見る水俣城

東京大学史料編纂所が所蔵する「天正九年八月肥州水俣城攻図」（以下「城攻図」と略する。註2）については、これまで積極的な利用がなされていないようであるが、図中には水俣城の構造を示す記述や島津軍の城攻めの方法を記す部分があり、前述の地表面遺構の観察による縄張り図との対比を行いたい（第1図参照）。

「城攻図」中心には水俣城が描かれる。水俣城は北西側の先陣となった「かる石の尾御陳」を基点とする仕寄の虎落（モガリ）垣とみられる柵で囲まれており、「かる石の尾御陳」南側では仕寄の柵は二重になっている。島津軍側の陣配置は、「かる石の尾御陳」が字狩石の地名を残す標高182.4mの山に、北側の「熊之牟禮」が標高233.5mの熊陣山に、北東の「銭亀力尾御陳」が「徒奈記」（津奈木）に抜ける隘路の「歌坂」の峠周辺の台地に、東南の「八景力尾御陳」が水俣川北岸の山に、「出水陳」は湯立川南岸の陣坂周辺の丘陵上に比定できる。「出水陳」を除けば各陣は相互に道で連絡し、北からの相良軍の侵入を阻止する配置となっている。



第3図 天正九年八月肥州水俣城攻図
（東京大学資料編纂所所蔵）

水俣城部分では、半端な二重線を入れ「皆俣」と記す曲輪が西端にあり、この東側に二重線で表記される「ホリ」によって区画された曲輪があり、さらに東側には「トリソヘ」と記された曲輪がある。「トリソヘ」の北東外縁にも外郭防御線を表現するとみられる二重線の表記があるが、「ホリ」といった注記はない。これらの区域は全周を島津軍側の仕寄の柵が取り巻き、水俣城の全域であることを示す。

「城攻図」に見える水俣城は、台地の形状や道・川の様子から、また、島津軍の陣地の配置から縄張り図にみられる城域に類似する。西端曲輪の箇所は南麓に区画された「ふもと」があり、また、周辺三ヶ所に「口」と記入された出入口があり、主郭の曲輪であったと認識できる。筆者の縄張り図ではIおよびIIの曲輪に相当する。その東側曲輪の部分は「ホリ」に挟まれた曲輪であることから、IIIの曲輪に

比定することができる。「トリソへ」の部分は地形の表現と広大な面積を有することから、IVの曲輪に相当することが明らかである。

4 まとめ

水俣城は交通の要衝にあたる水俣川河口に近い市域では唯一のシラス台地を選定して築かれている。縄張りは西方に延びた舌状の台地を堀切などで分断した4箇所曲輪群からなり、後に織豊城郭として改修を受ける台地先端周辺を主郭とする。主郭南には「ふもと」を置き、支城の政庁的空間とした。主郭には三つの虎口の表記があり、南側「ふもと」の南東隅が大手門、「ふもと」からの主郭への上り口にも虎口を備え、北側の小川付近のものは搦手門の場所であろう。各曲輪は急崖が発達するシラス台地特有の地形を外郭線に利用したもので全体的には粗放な構造を示し、階層性・求心性は希薄である。その中でIIIの曲輪は局部的な畝状堅堀群の採用や櫓台状の小曲輪、東辺の横堀・堅堀で防御した虎口など、顕著な遺構が残り要害性が高い。一方、広義の城域としては水俣川右岸の水田地帯と北・西側の侵食谷を流れる小川を防御ラインに利用したと推定され、「ふもと」周辺から陣内阿蘇神社にかけての南麓や、北側の小川と曲輪群に挟まれた部分などが、外曲輪として家臣屋敷を置いた場所と想定できる。町屋は水俣川・湯出川河口の三角州の「中島」にあり、城下には立地していない。海岸に位置する湊町であり、水俣城の外港として機能したと考えられる。

水俣城の普請は断続的に継続されたとみられるが、史料からは天文22年3月に当主相良晴廣とその父の上村頼興による「公儀」があり、この公儀は関を設けるための行動と推定されるように、この時期に大きな普請が実施され城容を整えたことが想定される。

島津軍の水俣城包囲は、兵力11.5万人の大規模な動員で、籠城の相良方は「求摩・八代・

水俣城七百人」と伝わる(註3)。「城攻図」に拠れば、島津軍は仕寄の柵に5間毎に「立板」を立てて隙間なく包囲するとともに、城域東部の「トリソへ」(取添)に飯野衆・清武衆らが兵を進めて堀を築き、鉄砲を撃ちかけて籠城側を威嚇しているようである。

この水俣の陣で相良家当主の義陽は圧倒的な兵力を前に島津義久に服属し、葦北・八代を失い、同年末に甲斐宗雲攻撃の先陣となり「響野原戦」で戦死した。天正9年の水俣城の籠城戦は、戦国大名相良氏の命運を左右した領国境目の決戦であり、九州制覇を目指す島津氏にとっては肥後国完全征服のための第一歩であった。

(註1) 高田 徹「肥後加藤領南端の城郭」『南九州城郭研究』創刊号、南九州城郭談話会1999。

(註2) 本稿では「文書にみる肥後の戦国展」(熊本県立図書館、1998)所収の図を一部加筆し転載した。

(註3) 「肥後合戦陣立日記写」『薩藩旧記雑録後編卷十二』。相良氏の編纂史『南藤曼綿録』では「千余人」とする。

機関誌3号原稿募集

<仕様>

1. A4判 縦書き 本文10.5歩
2. 1頁 1行33字×26行×上下2段組
= 1,716字(四百字原稿用紙4.3枚)

<目次>

1. 論文 400字×50枚程度(図版註含)
2. 研究ノート 400字×20枚程度(図版註含)
3. 史料紹介 400字×5~20枚程度
4. 城郭関連文献一覧
5. 図書紹介・書評
6. わが町のお城拝見

*原稿提出は、印刷原稿とフロッピーを一緒に提出ください。

*送付先 〒899-5421

鹿児島県始良郡始良町東餅田498

始良町歴史民俗資料館気付 下 鶴 弘

◆◆ 国分清水城跡見学記 ◆◆

下 鶴 弘

昨年暮れに国分市の清水城跡を訪れる機会があったので、以下にその概略を報告したい。

清水城跡は市街地を見下ろす城山公園の北隣の丘陵にあり（第1図）、城域は高さ50m以上の断崖に囲まれた頂上平坦部に集中している。この城域は西北端部を除き、ほぼ小字「外城」と一致している（第2図）。

戦国末期の国分地方の情勢を概観してみよう。加治木・溝辺を支配していた肝付兼演、生別府城（隼人町長浜）を守る島津貴久の家老樺山善久、隼人城（国分市）を中心に清水城・姫木城を支配した本田董親が対立し、島津貴久は樺山氏と謀ってまず本田氏を滅ぼし（天文17年1548）、貴久は弟である忠将を清水城の城主にすえた。翌年、貴久は肝付氏を破って大隅半島の本拠地高山城に追い込むことに成功している。

島津忠将は、永禄4年7月12日（1561）、家老町田忠成の諫止を振り切って竹原山で苦戦する味方を救うために出撃を強行し、敵中に孤立して馬立坂で戦死したという。

『三国名勝図会』では、「当城又隈部城といふ、或は清水本城といへるは此城なり、城址山上にて、葦原山と名づく、東は原野に接す、深塹の跡あり、南は谷にて通路あり、西は平地に臨む、北は谷にして、水田あり、南より西北の三面は直立して屏風の如く、高さ四町計りなるべし、山上に高城・末原宅地・平澤津・



第1図 位置図

御屋地等といえる曲輪を分つ、高城と末原宅地との間に水泉湧出し、水勢甚盛にして川となる、当城通路二条ありて、大門口は南にあり、後門口は北にあり、城址高峻にして天剣の名城なり、」とある。

第3図の城郭遺構群縄張図は、今回現地を確認した遺構略図である。測量は行っていないので正確さはないが、相対的な位置関係は把握できると思うので参照していただきたい。

北西にある地頭館跡の北側丘陵は、貝吹ヶ城であろう。現在土取り場となっている。

忠将館跡は北側に土塁を巡らし、4段の曲輪からなる。清水城の根小屋的な位置にあり、「御屋地」曲輪に比定できる。ここより尾根伝いに曲輪1・3へ達していたと推測される。

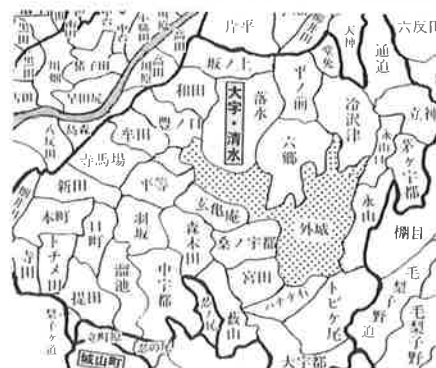
頂上部の遺構群は、3つに大別できそうである。まず、曲輪1から曲輪8までのⅠ西曲輪群、曲輪9から曲輪11までのⅡ中央曲輪群、曲輪12から曲輪16までのⅢ東曲輪群である。

遺構としてはⅠ西曲輪群がまとまっており、Ⅱ・Ⅲ曲輪群はプランが不明であるが、東からの侵入に備えているように見える。

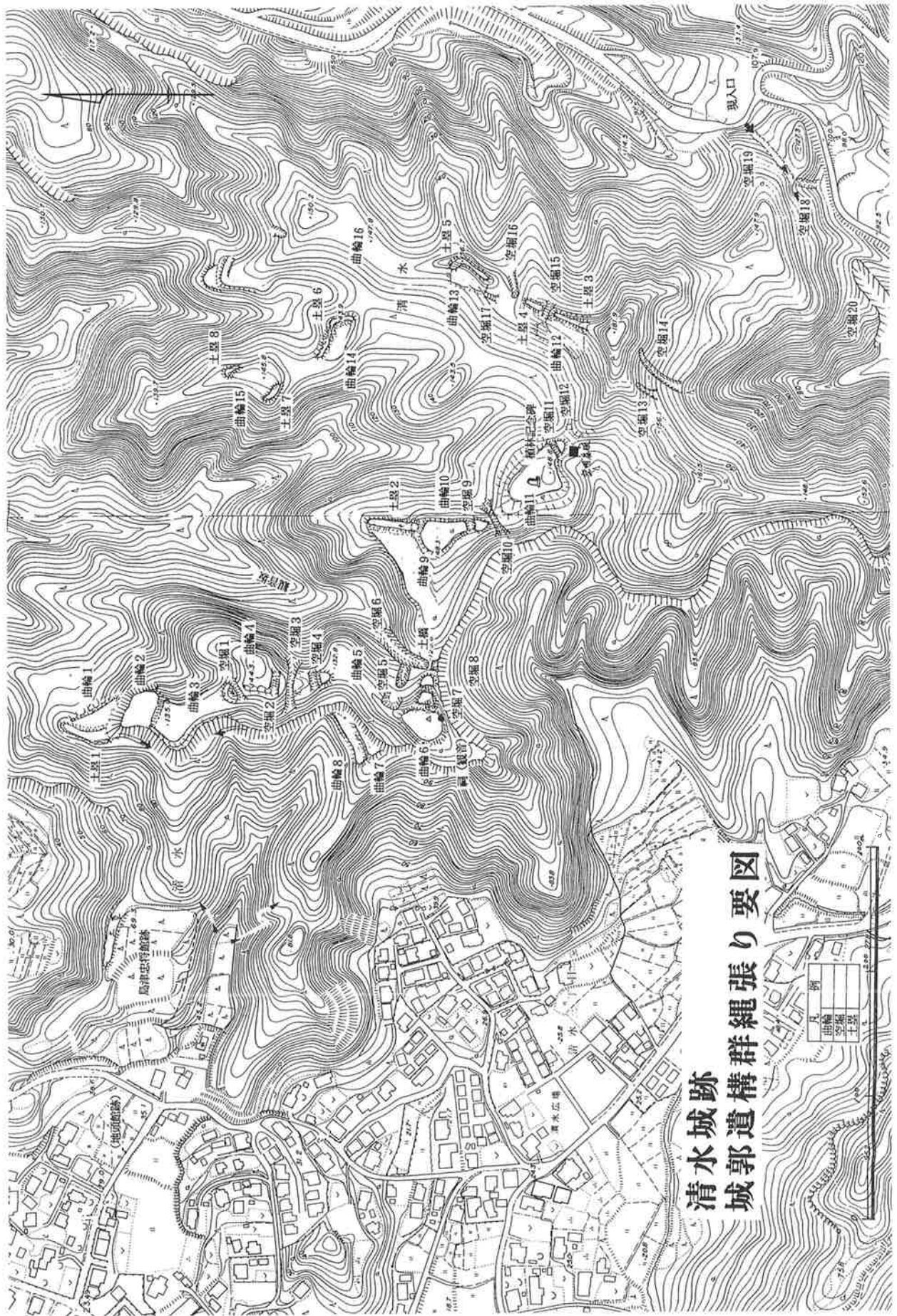
機会があれば、未踏の尾根も歩いてみたい。

＜参考資料＞

1. 1915年 『清水村史料』
2. 1997年 『国分郷土誌』上巻付図「字調査図」
3. 1987年 『鹿児島県の中世城館跡』



第2図 字調査図（大字・清水）



◆◆ 第 19 回見学会報告 ◆◆

下 鶴 弘

◎見学会

2月23日土曜日午前9時、集合場所である西鹿児島駅前の駐車場には、朝早くから参加者が集まった。鹿児島交通の大型バスを借り切り、1泊2日の肥前名護屋城跡までの見学会である。参加者は総勢42名であり、鹿児島インターより高速道路に乗り、名護屋へ向かった。途中、熊本県の南関インターを降り、1時前に三加和町の田中城跡に立ち寄った。途中の道筋は幅員が狭く、ハラハラしながらの道行きであった。山麓には駐車場が整備され、各曲輪及び法面はよく管理されていた。近くにお住まいの元町長さんに歴史的背景の説明を受けた。昭和59年以降、継続的に発掘調査がなされ、県指定史跡となっている。

参加者の関心を惹いたのは、天正15年(1587)の国衆一揆の様子を描いた、『迎春・和仁仕寄陣取図』(山口県立図書館蔵)である。

この図は豊臣秀吉が派遣した1万の軍勢が田中城を包囲して兵糧攻めにした際の絵図面であるが、発掘の成果もこの図面の内容を裏付けているという。ところで、主体部に建立されていた三位一体のコンクリート像はご愛嬌というべのものであろう。

予定より早めに名護屋城跡へ到着したので、取りあえず整備された城跡を見学した。破城を示す崩された隅石と残された高石垣のおりなす曲線美は、南九州には見られないもので、技術の確かさと規模の壮大さに圧倒された。

当日の宿は、唐津市街を抜けた隣町の浜玉町にある。バスは延々と続く虹の松原の中を走り抜け、ようやく旅館魚半へ辿り着いた。

旅の疲れも夜の懇親会で十分に癒されたようである。この席では、県文化財功労者を受賞された三木会長へのお祝いも行われた。寛いだ中の懇親会も夜の帳とともに幕を下ろし

たが、珍味シロウオの踊り食いには、閉口した参加者もいたようだ。

24日日曜日は、朝食後8時45分に出発して名護屋城博物館へ向かった。この日の案内は、副館長兼学芸員の宮武正登さんである。1時間ほどの館内見学の後、いよいよ島津義弘陣跡へバスで移動した。昨年から一帯の草払いを行い、現地の地形測量を実施しているとのことであった。

島津義弘陣は、名護屋城を取り囲む120陣城の中で、最西端に位置し、やせ尾根上に長く曲輪が配置してある。南北には当時入江が深く入り込んでいたと考えられる。東の曲輪は道路によって開削分断されている。

宮武さんの話では、石垣石に割石が用いられていること、また、通路から見た石垣の視覚的要衝には、鏡石が配置されていることが指摘された。今後、これ以降の島津氏の築城では類例がないかどうか、石垣の編年上、注意が必要とのお話であった。

陣跡は今後計画的に発掘調査がなされるとのことであったので、織豊期の島津氏関係の城跡として今後の成果が大変楽しみである。

最後に、NHKの大河ドラマで脚光を浴びている前田利家陣跡も案内していただいた。

帰りは福岡市を経由し、福岡市博物館を見学して全員無事に帰路についた。

今回、案内者や博物館の方々には事前の準備や当日の受け入れに大変お世話になった。ここで改めて感謝の意を記しておきたい。



島津義弘陣跡にて

◆◆ 第20回見学会・例会・総会報告 ◆◆

有川孝行

◎見学会

周囲の稲が穂をつけはじめ秋の兆しを感じさせる平成14年9月7日(土)、集合場所である国分市シビックセンターには、早くから約80名の参加者が集まり、見学会は予定通り10時から始まった。三木靖会長の挨拶、上田耕事務局長の日程説明の後、自家用車に乗り合わせて国分市教育委員会の鈴木順一氏の案内で舞鶴城と清水城へと出発した。

舞鶴城は、戦国島津家の太守島津義久が慶長9(1604)年から晩年までを過ごした石垣を用いた館造りの城跡で、この城を中心に現在の国分市市街地が形成されているという。見学会一行は、舞鶴城跡に復元された朱門を横目に一路清水城跡へと向かった。

清水城跡は、国分市の城山公園の北隣の丘陵にあり、高さ50m以上の断崖に囲まれた頂上部を中心に各曲輪が構成された山城で、島津貴久が三州統一へと展開するなかで弟忠将を城主に据えた城跡でもある。市道郡田・毛梨野線の急峻な坂道を登りきると清水城跡の大手口に到着し、鈴木順一氏と下鶴弘氏の案内で急峻な空堀を通して城内へと入っていった。尾根筋を空堀で断ち切り、さほど広くない尾根部を削平して曲輪とする所など岩剣城跡(始良町)を彷彿させるものであった。また、北西部に位置する曲輪群へと進んでいくと眼下に国分平野が一望でき、あまりの眺望の良さに足がすくむ思いであった。戦国島津氏の三州統一への足がかりとなった城跡だけに大いに今後の詳細な調査に期待したい。

案内者や国分市教育委員会の方々には、事前の準備や当日の受け入れに大変お世話になったことをここで改めて感謝の意を記しておきたい。

◎例会

国分市シビックセンター会議室で午後1時30分から4時30分まで開催された。例会は、橋口亘会員、上田耕事務局長の司会により下記順番で行われた(一部発表内容は割愛させていただきます)。

1. 鈴木順一「国分市の山城」

国分市内に所在するクマソ・ハヤト関連城跡の推定地検証と7ヶ所の中世城郭の変遷を中心に詳細な説明があった。その中でザビエルと島津氏の動きについて年表を用い、ザビエルと島津貴久の会見の地が国分市清水城であったとの見解を強調した。

2. 下鶴 弘「国分清水城跡見学記」

踏査による縄張図を作成し、字図や郷土誌などの史資料を活用しながら清水城跡の全体像及び変遷過程を検証した。

3. 重久淳一「富隈城跡の石垣について」

これまで4回の発掘調査によって戦国島津家の太守義久が築城した富隈城跡の全容が解明されつつあるなかで、今回島津氏による石垣の構築技術を知る貴重な調査結果を報告した。

4. 白岩 修「宮崎県木城町高城跡の発掘調査」

平成4年度に実施された高城跡の発掘調査の経緯及び調査結果と今後の課題について説明があった。

5. 各地の城郭調査の現状

- ・堀田孝博「宮崎県内の状況」
- ・鶴嶋俊彦「熊本県内の状況」
- ・坂元恒太ほか「知覧城跡の調査」
- ・有川孝行「油須木城跡の調査」

◎ 総 会

総会は、議長を米永健二会員にお願いし、下記の議案について審議をしていただいた。

議案1 平成13年活動報告と平成14年活動計画について(上田事務局長)

議案2 平成13年会計報告(橋口幹事)

議案3 役員改選

議案1～3ともにとくに大きな議論もなく可決された。役員改選において、新たに幹事に坂元恒太会員が推薦されましたので、今後の活躍を期待します。平成13年の活動報告及び14年の活動計画は次のとおり。

・平成13年活動報告

1. 見学会・例会

・第17回総会・講演会・研究発表会・見学会・懇親会(5周年記念大会)

日 時 5月26・27日(土・日)

場 所 鹿児島市

会 場 鹿児島県歴史資料センター黎明館

見学会 鹿児島市内の城跡

・第18回見学会

日 時 12月2日(日)

場 所 加世田市別府城跡(新城)

知覧町知覧城跡(蔵之城)

2. 会報

『南九州の城郭』第17号刊行 5月25日

・平成14年活動計画

1. 見学会・例会

・第19回見学会

日 時 2月23・24日(土・日)

場 所 佐賀県肥前名護屋城跡・島津義弘陣跡

・第20回見学会・例会・総会

日 時 9月7日(土)

場 所 国分市舞鶴城跡・清水城跡

・第21回見学会・例会

日 時 12月(未定)

場 所 宮崎県高城跡・高鍋城跡

・第22回見学会

日 時 未定

場 所 未定

2. 会報

『南九州の城郭』第18号刊行 2月15日

『南九州の城郭』第19号刊行 9月刊行予定

3. 機関誌

『南九州城郭研究』第3号編集

お知らせ

三木靖会長が、11月6日、文部科学大臣より地域文化功労者として表彰されました。本会等の活動が認められたものです。

清水城跡にて(9月7日 重久写)



【新入会員】

(10月31日現在)

上川路直光 窪田 裕記 須田 郎平

西村 健一 堀田 孝博

(株)埋蔵文化財サポートシステム

編集後記

◆第19号をお届けします。今年は、南九州で発掘調査報告書の刊行が論議になりました。その余波が会報にも及んできました。原稿の集まりが極端に悪くなったのです。これまで会員の多くの方々には、日常業務をこなしながら投稿をして頂いておりました。しかし、問題化してからは、会報に振り分ける余力がなくなりつつあるというのが実感です。そういうことで、今回も限られた方々からの御好意でやっと発行することができました。感謝申し上げます。いつも、同じ方々に負担をかけており、今後の原稿募集については、検討の必要を痛感しております。

◆今号には、鶴嶋俊彦氏からの水俣城についての論考と下鶴弘氏の清水城跡の調査記録を掲載することができました。上記の理由で鶴嶋氏には、またまたお願いしたものです。本当に感謝に絶えません。国分市の清水城は、島津貴久がザビエルと会見したという説があり、三州統一の足がかりとなった城です。今後の詳細な調査が期待されます。

◆次号の会報発行は、2月上旬の予定です。原稿は下記まで。

(Shige)

重久淳 一 〒899-5106 始良郡隼人町内山田 1138-5

南九州の城郭 第19号

発行所 鹿児島県川辺郡知覧町郡17,880
ミュージアム知覧内 上田耕 気付
南九州城郭談話会
(振替口座 02040-6-7850)

発行者 三 木 靖

編集者 重 久 淳 一

印刷所 (株)ト ラ イ 社

入会金500円 年会費2,000円